高津おはなしアーカイブ

●小泉　一郎（こいずみ　いちろう）さん

昭和５年生まれ　８６歳
川崎市宮前区野川在住

◆子どものころのこと

生まれた時からずっとここに住んでいます。当初は祖父母と両親と３人兄妹の7人家族でしたね。

妹とは２歳、弟とは９歳離れていました。弟とは喧嘩にもならなかったですね。

父は農業をしていました。大昔は酒造をしてたようで、家にはその時の道具類、例えば大きな蒸留釜などがあったんですよ。戦時中に供出して、もう残ってないですがね。

そのころ野川の農家は１５０軒。ほとんどが農家だから、全体では１６０軒ほどだったでしょうかね。

買い物は、今の能満寺のバス停のところに何でも屋さんがあって、たいていそこで間に合わせてましたね。千年側にある野川屋というお店なんだけれど、隣の野川側に橘屋って名前の屋号があって、子供心に面白いなぁと思っていました。

味噌や醤油は家で作ってましたね。母が夜中に麹をかき回してましたねえ。

お正月には餅つきをして、水餅っていうのにして、保存して農繁期に食べてました。

◆小学校低学年のころ

小学校は野川小学校です。妹も一緒に５、６人が連れ立って通っていました。

坂道が多いからね、雪なんか降った時は大変でしたよ。戦争中は、軍隊が使うからゴムがなくて、長靴なんて手に入らない時代でしたからね。裸足にゲタ履いて、そのゲタに雪がくっついちゃうから冷たいの。

着るものは、着物の子もいたけど洋服の方が多かったですね。新しい靴なんて手に入らなかったなあ。運動するときは「ラン足袋」です。「ランニング足袋」の略ね(笑)。裏は帯芯みたいな厚い布を重ねてあるの。

そのころの遊びと言えば、凧揚げ、コマ回しかな。あと兵隊ごっこ。サンゴジュ（珊瑚樹）の実を弾にして鉄砲を手作りしてました。

影向寺（ようごうじ）ってお寺が近くて、そこはいい遊び場でした。落ち葉にすっぽり潜り込んだり、木に登ったり。枝もずいぶん折ったし、縁の下で蟻地獄に水をかけて遊ぶから土を荒らしちゃってね。散々そんなイタズラもしてました。影向寺のお坊さんが橘小学校の校長先生

でね、イタズラすると私が通っていた野川小学校に知らされちゃってさ。年中叱られてました(笑)。

◆小学校高学年のころ

高学年のころは飛行機を作るのに凝ってました。箱根の林間学校で飛行機大会をやって、仙石原のてっぺんから飛ばしたんですが、私のが見えなくなるくらい飛んでね、表彰状をもらいましたよ。

夏休みは矢上川で泳いでました。田圃に水を引くために堰止めてあるから、そこで泳ぐの。泳ぎの“番”をする先輩の中学生がいて、監督みたいなもんですね。上流で泳いでいい者と下流で泳ぐ者と分けたりするんです。そうやって子どもたちのルールで事故を防いでたんですね。

“番”は代々引き継いでいくんですが、引き継ぐ時にはテストみたいなのをやってました。

川がだんだん汚れてきて泳げなくなっちゃったもんで、“番”をやったのは私が最後でしたね。

◆中学校のころ

中学は横浜の浅野中学というところに通いました。でも勉強なんて全然できなかったですね。一年生の時から「法専」っていう鉄工所へ勤労奉仕に行って、主に溶接の仕事で、鉄兜なんか作っていました。

朝８時半から５時まで、お弁当を持って通いました。南武線と京浜急行を乗り継いで、鶴見線の浅野っていう駅でしたね。当時、京浜急行に“キリンビール前”っていう駅があってね、学校はその駅の近くでした。

工場には男性の社員はほとんどいなくてね、皆出征しているからね。我々を指導する技術者が１人いて、他は皆女性でした。

その工場にはクラスから２０人ほどが一緒に行きました。日産自動車へ行った者も多かったですね。

中学の職員室には軍刀を下げた幹部の兵隊さんがいました。教練を指導しに来てたんです。匍匐（ほふく）の練習などして、その後工場へ行ってました。皆、軍隊の学校に行くために中学に行ったんですからね。

水練も受けました。海軍から教えに来るんです。遠泳ってことで金沢（横浜市金沢区）から追浜（横須賀市）までの往復、朝から夕方までずっと泳ぎっぱなし。昼食も泳ぎながらでした。当時はなかなか食べられなかったアンパンを２個ぐらいもらいましたかね。水の中で食べるからすぐ濡れちゃうんだけど。１０時と３時には氷砂糖をくれました。

帰ってくると体が冷え切っているんですが、たすき掛けの国防婦人会の人たちが熱い葛湯を作って待っていてくれていました。

◆横浜大空襲

勤労奉仕に行っていた工場は京浜工業地帯でしたからね、軍需工場をめがけて敵機の襲来は頻繁で、終戦間際のころは空襲警報が鳴るより飛行機が来る方が早かったですよ。コルセアっていう飛行機でした。防空壕に逃げる間もなくて、見てる前で撃たれたり爆撃で亡くなった仲

間もいるんです。

横浜の大空襲の時はすごかったです。一面焼け野原で。そこここに亡くなった方が累々と横たわっている。まだあたりが燃えている道を、工場からこの家まで線路伝いに一人で歩いて帰ってきました。昼頃から歩き始めて、家についたのが７時ごろでした。

この家は丘のてっぺんにあるから、京浜工業地帯のほうが真赤に染まって燃えているのが見えていたんですね。それで母は私がもう死んじゃったんじゃないかと、ずっと心配して帰りを待っていました。

◆海軍兵学校を目指して猛勉強

私は海軍兵学校に行きたかったんです。あとちょっと、ほんとに何か月かしたら行けるところだったんだけど。終戦になっちゃって行かれなかった。残念でしたよ。本当に残念だった。

工場の帰りには毎日夜１１時ごろまで海軍兵学校に行くための勉強を補習してもらいに大学の先生のところに通ってたんです。海軍の学校に行くには身体強健なだけじゃなく頭脳も明晰でなくちゃいけない。学校の成績が５番までにいないとダメって言われてましたからね。

もちろん「お国のために死ぬんだ」「日本を勝利に導くんだ」って思ってました。洗脳されてたんですね。死ぬために猛勉強するなんて、今の時代の人が聞いたらおかしな話ですよね。

◆終戦

終戦って聞いたときは訳が分からなかったですよ。学校へ行ったら校長が「デモクラシー云々」って話をするんです。デモクラシーなんて聞いたこともない。「何だ、そりゃあ」って感じでした。

モノの価値が１８０度というか３６０度というか変わっちゃって、いったい何をしたらいいのかわからなくなりましたね。糸がぷつんと切れたようで、生きてる意味が分からなくなってしまいました。

中学を卒業したのが、終戦の翌年で、もうその先のことがどうにもならないような混乱の時期でした。

卒業後は家の農業を手伝ったわけですが、ちゃんと畑仕事ができるようになったのは昭和２５年ぐらいからですよ。戦争が終わってすぐの頃なんて何もかもがひどい状態でしたから。５年くらいしないと日本も落ち着かなかったです。

◆農業に取り組む

その後は農業をやって、人参の改良に取り組みました。私、人参の種を開発して特許を持っているんですよ。根の肩が地表に露出しないから冬に強くて、形も当時の主流の円錐形ではなく、尻が丸い円筒型という特長があるんです。

試作種子の缶詰

試作種子の缶詰（裏面）

この種を作るのには２０年くらいかかりました。親せきが品評会に出して優勝したのがきっかけで特許を申請することになったんですがね。

農林省（当時）が全国で試してみた結果､推奨してくれることになりましてね。現在全国に出回っている人参は、私の種の子孫になります。

実は私自身は子供のころ人参嫌いで食べられなかったんですよ(笑)。でも中学の時、演習に行ったら人参しか食べるものが出なくって、否応なしに食べるようになりました。

終戦後の楽しみといえば、野球でしたね。チームを作ったんです。帯芯の布でユニフォームを作ってもらってね。ラシャの帽子を切っちゃって「野川」ってロゴマークを作りましてね、自分で縫い付けました。

そんなに強くはなかったけど、他の地域のチームと試合もしてました。

◆史跡の保存に尽力

今、史跡保存会の会長をやっているんですが、子どもの頃よく遊んだ影向寺って実は関東屈指の古刹なんですよ。何しろ天皇家の勅願寺ですからね。大切な文化遺産として守らなくてはと考えています。

現在、伽藍は県から、仏像は国から、それぞれ重要文化財の指定を受けていますがね､昔は仏像は国宝だったんですよ。また国宝に戻していただけるよう署名を集めたりしています。

子どものころさんざんイタズラしたから、そのお詫びみたいなもんですね(笑)。

あの仏像ね、戦争の時には近所の人が５、６人がかりでかついで防空壕へ運んだりして守ってきたんですよ。両脇に日光・月光菩薩の像が置かれているんですが、江戸時代の火災のせいでしょうか腕が片方折れて、別の木で継ぎ足してあったんです。上野の美術館が修理してくれるっていうんで、毛布にくるんで私のトラックで上野まで運んだこともありました。

署名を集めるだけでなく、修理や保存を県に働きかけるなど、地道な活動を続けております。おかげ様で昨年は市から文化賞をいただきました。

◆影向寺の思い出など

影向寺では縁日のことを「町」って言うんです。戦前はすごく盛大だったんですよ。境内も今よりずっと広かったですしね。

「町」の一週間前には出店する人が集まって、“地割”って言う、売り場の割り付け作業をするんです｡見世物小屋とか、ヘビを食うのを見せる店とか、紅白幕で囲ったところで芸者さんが踊ったり接待する小座敷もあって。風流なもんでしたよ。

もちろんお菓子もいっぱい売ってまし

たし、まあ色んなのがありました。今家があるなだらかな坂のところでは、右の方は金物屋、左側は植木屋って決まってました。

焼きそばとかたこ焼きとかが、５銭くらいでしたかね。子どものお小遣いは５０銭くらい持って行くのが一般的だったんじゃないかな。

親せきにね、1 円くれる気前のいい人がいて、楽しみにしてました。それがね「兌換券（だかんけん）」という金券だったんです。紙幣に「金壱円と交換申すべく候」なんて書いてありました。

「町」は２日間やってて、人もいっぱい来て賑やかでした。神社のお祭りより楽しみだったけど、戦争が始まってからはそういうのが一切できなくなっちゃいました。今の「町」はお店もほとんど出店してなくて寂しいですね。

保存会で歌手を呼んだりして、また盛り上げようとしてるところです。このところ地元の野川中学校からは毎年ブラスバンドが来てくれてます。歌も歌ってくれるんです。少しばかりお礼をすると楽器が買えるって喜んでくれてます。こんな風に若い世代が伝統行事に関わってくれるのは嬉しいですね。

◆そして今、思う

私たちの世代は軍国主義の時代と民主主義の時代と両方を生きてきたわけですが、１７、８歳の多感なころがちょうどその境目だったんですね。

その後７０年間戦争もなく、平和な時代になってよかったですよね。

戦争は本当に悲惨なものです。

（平成２８年１１月２９日取材）